水稲･大豆の大雨被害対策

平成 18 年 7 月 19 日
農 畜 産 振 興 課

■　水稲

1　対策にあたっての留意点

・水稲の生育が違うと、同じ浸冠水を受けても被害量に大きな差が生じる。被害を受けやすい時期は穂ばらみ期（減数分裂期）を中心とする出穂前２０日頃から出穂期にかけてである。

・同一期間の冠水でも水の清濁、流速、水温ならびに葉の露出の有無により異なり、水が濁っているほど、水の動きがない場合、水温が高いほど葉先が水面上に出ていない場合被害は大きい。

・生育段階の最も進んでいる品種は、平坦部の「ハナエチゼン」であって、この生育ステージは出穂期から穂揃い期となっている。また、「コシヒカリ」も５月下旬植までは幼穂形成期となっており、水稲にとっては重要な時期を迎えている。

2　大雨の事後対策

①土砂流入に対する措置

土砂流入の少ない所では、土砂を取り除き、稲の生育挽回を図る。土砂の流入量が多くても除去が可能であり、その後の湛水に支障が少ない場合は、湛水のできる程度に株元の土砂を取り除く。この場合、流入土砂の除去はできるだけ早く行う。

②浸・冠水に対する措置

速やかに退水措置を講じ、一刻も早く稲体を水面上に露出させる。排水が十分でなくても葉先が水面に出ると被害が軽くなる。

水温が高いと被害が大きくなるので、排水できなくても努めて新しい冷たい水を流入させる。

濁水が停滞している場合は、濁っていない水の流入を図り、新根の発生を促す。

減水とともに、木片その他の浮遊物を除去すると同時に稲体に付着した泥土を洗い流す。その際、急激な完全排水はしないよう注意する。

浸、冠水田では黄化萎縮病、白葉枯病、アワヨトウなどの病害虫が異常発生しやすいので、適切な防除を行う。

③塩水の流入に対する措置

塩水が流入した水田では、排水後直ちに真水の掛け流しを行い、水田土壌の塩分濃度を下げる。

（詳細については作物気象災害対策指針Ｐ２６～３４、５４～５７を参照ください。）

■　大豆

1　大雨の事後対策

①浸・冠水に対する措置

できる限り排水がスムーズにゆくよう排水対策を徹底する。天候状況が回復ししだい中耕を実施し、土壌中の気相を多くし根の健全化を図る。

なお、中耕培土は開花期までに終える。

（詳細については作物気象災害対策指針Ｐ８２～８７を参照ください。）

H 18.7.19 農畜産振興課

園芸品目の大雨被害対策（第１報）

■共通事項

１排水対策

・ほ場内の排水路の整備等により排水に努めると共に、浸水時は速やかに排水する。
・特に、施設栽培では施設周辺の排水路を整備し、雨水の侵入を防ぐ。
・ほ場内にたまった水は、強制的にポンプを使用して排水する。

２病害虫対策

・排水後は、感染源となる罹病葉や株を早期に処分すると共に、速やかに薬剤防除により予防する。
・但し、衰弱した株等は薬害を受けやすいので注意する。

■野　菜

１共通事項

・草勢が衰弱した場合は、必要に応じて微量要素を含む葉面散布剤を散布する。
・土壌水分が著しく多い場合は、畦や株元の土をむやみに動かしたり、足を踏み入れて土壌の固結を招かないように注意する。

２施設野菜

・草勢が衰弱した場合は、早めの摘果（花）を行い、草勢の回復を図る（特に果菜類）。
・ハウス内の換気に努め、浸水した畦は晴天になるまでの間、マルチをめくって乾燥に努める。但し、畦表面に根が出ている場合はめくる程度を少なくする。
・降雨後の晴天で株が萎れる恐れがある場合は、ハウス内の換気、水の茎葉散布、遮光、蒸散抑制剤の茎葉散布等の対策を実施する。
・水をかぶったイチゴ苗は付着した土を洗い、枯死した茎葉を除く。

３露地野菜

・土壌が固まらない程度に乾いた時に、少量の窒素とカリを追肥し、根を傷めないように浅く中耕する。

■果　樹

１共通事項

・敷きわら、敷き草を準備しておき、降雨後の晴天時には樹体が乾燥しないように保護に努める。また、雑草は、適宜刈り取り、敷き草として利用する。

２ぶどう（ハウス栽培）

・収穫中の園は、裂果対策として、排水に注意するとともに、加温機等のファンによる送風などの除湿に努める。
・根傷みが激しく着色不良、着色遅延が予想される場合は、摘房に努める。特に、摘房作業の遅れから被害が拡大しないように注意する。

■花　き

１共通事項

・大雨でほ場がぬかるむと支柱が倒れやすくなるので、早めに補強しておく。
・株が冠水した場合は、早急に水で土を洗い流す。また、冠水した株は、病害が発生しやすいので注意する。
・草勢が衰弱した場合は、必要に応じて微量要素を含む葉面散布剤を薄い濃度で２～３回散布し、草勢の回復に努める。

２施設栽培

・降雨後の晴天で株が萎れる恐れがある場合は、ハウス内の換気、寒冷紗等による遮光に努める。